琵琶法師のものがたりと儀礼

兵藤裕己

1　琵琶とノイズ

平家がほろんだ平安末期の内乱を、治承・寿永の乱という。この内乱にまつわる物語は、事件後まもなく琵琶法師によって語り出され、鎌倉初期に平家物語としてまとめられた。

小稿では、平家物語の語り手である琵琶法師について考えるが、琵琶法師にかんしてまず問題になるのは、かれらが使用した琵琶という弦楽器である。それから、琵琶法師が盲目の芸能者であり、同時にシャーマニックな宗教者でもあったということだ。

シルクロードを経由して東アジアへ伝わった琵琶は、中国で改良されて、八世紀（あるいはそれ以前）の日本に渡来した。日本の琵琶には、大別して、雅楽の琵琶と、琵琶法師の琵琶がある。琵琶法師の琵琶の（雅楽琵琶とは異なる）特徴の一つとして、サワリがあげられる。サワリは、弦を弾いたときにビーンというノイズ（雑音）をひびかせる独特の仕掛けである。

武満徹がニューヨーク・フィルハーモニーのレナード・バーンステインの依頼で作曲した『November Steps』（1967年）には、薩摩琵琶が使われる。薩摩琵琶も、琵琶法師系の琵琶としてサワリがあり、いかにも琵琶の音らしい複雑な倍音＝ノイズをひびかせる。そのような琵琶法師系の琵琶のサワリについて、武満は、「雑音というものを媒体として自然世界へつらなってゆく」積極的な方法と位置づけている。

一六世紀以降、琵琶法師は、中国や琉球から渡来した三味線を手がけたが、つま弾きで弾かれる中国の三弦（サンシェン）や琉球の三線（サンシン）にたいして、本土の三味線は撥（バチ）で弾奏される。撥を使うのは、初期の三味線音楽が琵琶法師によって担われたからだが、それからもう一つ、中国や琉球の三弦にはサワリがない。ノイズのない純音（楽音）で演奏される点が、日本本土の三味線とは大きく相違する。

あえて音楽の音色にノイズをまじえるわけだ。それはたしかに、武満徹がいうように、「自然世界」、あるいは、ことばにならない存在のざわめきのようなものに、声をあたえるための盲人芸能者たちの工夫だったろう。

2　耳なし芳一の話

琵琶法師という語から、だれもが思い起こすのは、ラフカディオ・ハーン（日本名、小泉八雲）の「耳なし芳一の話」だろう。江戸時代の『臥遊奇談』という奇談集をタネ本にして、一九〇四年に、ハーンが、ボストンとニューヨークで出版した『怪談（Kwaidan）』の冒頭に収められた話である。

話の筋は、平家がほろんだ壇ノ浦（いまの山口県下関市）にある阿弥陀寺という寺に、芳一という琵琶法師が住んでいた。ある夜、芳一は、平家の死霊に招かれて、どことも知れない広大な御殿へ連れられてゆき、高貴な方の御座所とおぼしい広間で、平家物語の壇ノ浦合戦の一節を語る。こうして芳一は、毎夜いずこともなく出かけてゆく日がつづくが、そんな彼を不審に思った寺の住職が、寺男にゆくえをさがさせると、芳一は、寺のちかくの安徳天皇の墓所で平家物語を語っていた。住職は一計を案じ、死霊が二度と芳一を連れだせないようにと、芳一のからだに経文を書きつけた。その夜も死霊の使いが来たが、芳一のからだには経文が書いてあるため、死霊には芳一のすがたがみえない。だが、耳だけに経文が書き忘れてあったため、耳を引きちぎってもちかえった。そしてかろうじて命が助かった芳一のもとへは、平家の死霊は二度とあらわれることなく、この一件によって、芳一は琵琶の名手としてひろく知られるようになった。

この話は、源平合戦が戦われた瀬戸内海の周辺では、昔話や伝説として語られていた。「耳切り団一」の昔話（『日本昔話大成』第六巻）や、「耳なし地蔵」の伝説（『日本伝説大系』第一二巻）などだが、ハーンの「耳なし芳一」のタネ本になった『臥遊奇談』の話も、このような口承説話に取材したと思われる。

「耳なし芳一の話」では、この一件によって芳一は琵琶の名手として知られるようになったとあるが、「耳なし地蔵」の伝説では、寺の住職は、盲目のうえに耳まで失なった琵琶法師を哀れに思い、その後もかれを寺にとどめ置いて世話をしたとある。耳をとられた琵琶法師は、もはや「平家」を語ることができなくなり、あたかも廃疾者のごとく寺に収容されるのだ。

盲目の琵琶法師にとって、耳とはなにか。また、全身に書き付けられる経文（＝文字）とはなんなのか。あるいは、「耳なし地蔵」の話で、耳を失った琵琶法師が収容された寺の寓意するものはなにか。耳なし芳一型の話には、琵琶法師について考えるうえで、さまざまな寓意がはらまれている。

それらの寓意を考える手がかりとして、ここでは、やや唐突かも知れないが、現代の演劇と思想界に多大な影響を与えているアントナン・アルトーの「耳なし芳一」について言及してみたい。

3　アルトー版の「耳なし芳一」

アントナン・アルトーは、一九六〇年代後半のアングラ演劇の流行期には、ほとんど熱狂的によく読まれた。その後、ジル・ドゥルーズやジャック・デリダなど、フランスの現代思想家がアルトーに言及したこともあって、その著作集や全集（未完結）も邦訳されている（このことをフランス人に話すと、みな一様にびっくりする）。そのアルトーが、フランス語訳の「耳なし芳一の話」（一九一〇年にパリで出版された）を読み、二七歳（一

九二四年）の頃にリメイク版の短編小説「哀れな楽師の驚異の冒険（L'etonante Aventure du Pauvre Musicien）」を書いた。

ちょうどその頃は、アルトーがシュールレアリスムの運動に参加し、詩人・舞台俳優として活動しはじめた時期だ。そんな時期に、アルトーの芳一話は書かれたのだが、芳一のもとに最初に死霊が訪れる場面は、アルトー版では次のように書かれている。

芳一は空のまばたきも見ず、古い寺がそそり立つすぐわきの海も見えなかったが、やって来つつあった夜の動きのある魔法は、大気に戦慄と見えない存在の物音のようなものを伝えていた。そして盲目の楽師は、かくれた魔物や伝説的な平家の者どもの飛び交うのを感じていた。それらが通りすぎると芳一の肌に不思議な衝撃が伝わるのだった。

芳一は、怖くなった。ひと気のない寺は眠り込んでいた。海面はときに死者たちのもののようなため息を洩らすのだった。うずくまり、愛用の琵琶を抱きしめ、顔をのけぞらせ、貧弱な壁にもたれて、芳一は待っていた。サムライの横柄な声が芳一の名を呼んだのはこの瞬間だった。あたかも事物の本質から立ちのぼって来た声のように。声は一度芳一の名を呼び、次いでもう一度呼んだ。

（篠沢秀夫訳）

「海面が洩らす死者たちのもののようなため息」は、不思議にエロチックな死のイメージである。また、「見えない存在の物音」とあるが、そんな不可視の存在のざわめきのなかから、とつじょ、芳一の名を呼ぶ死霊の声が聞こえてくる。

芳一を呼ぶ声は、「あたかも事物の本質から立ちのぼって来た声のように」とある。それは、ことばとしての分節化を拒否するような声であり、常人には聞こえない死霊の声である。

「器官なき身体」（コール・サン・ゾルガーヌ）という言葉で要約されるアルトー的な思考のアポリアというのがある。わたしたちの生は、ことばによる分節化を拒絶するなにかだが、にもかかわらず、ホモ・ロクエンス（ことばをもつ人）としての人間は、自分の生を分節化・言語化して生きざるをえない。そのような人間は、アルトーによれば、生まれながらにして生をことば（ロゴス）によって略奪された存在なのだ。ことばに略奪される以前の生そのものを表象＝上演（represent）しようとして、舞台のうえで、ことばにならない呻き声や叫び声を発しつづけたアルトーは、人生の三分の一くらいを精神病院で過ごした。そのようなアルトー版の「耳なし芳一」では、芳一は、「あたかも事物の本質から立ちのぼって来た声」に誘われるように、向こう側の世界へ行ってしまう。

アルトー版でも、墓場で琵琶を弾いていた芳一は寺に連れもどされ、寺の僧によって全身に「死霊を遠ざける魔除けの文句」を書きつけられる。文字言語というのは、視覚的にも分節化されたことばだが、それはアルトーにとって、呪うべき「人間性」（ユマニテ）の刻印にほかならない。からだじゅうに文字を書きつけられたことで、芳一つまりアルトーは、こちら側の世界につなぎとめられてしまう。アルトーの体験に即していえば、精神病院に収監されてしまうわけだ。

芳一と僧との関係は、アルトーと精神科医との関係でもある。

では、精神病とはいったいなんなのか。フーコーによれば、精神病というのは、すぐれて近代の産物である（『狂気の歴史』）。中世以前には、西欧社会にあっても、狂気は、宇宙の根源にある不可知で偉大な力と交流する何かだった。そんな前近代の狂気が、近代になると精神病棟に封じ込められていく。その過程を、フーコーは詳細に説いているのだが、それでは、精神科医という「近代」が介入しないと、どうなるか。

4　地神（じしん。大地の神）の信仰

たとえば、日本の南西諸島（奄美、沖縄）には、ユタという女性シャーマンがいる。彼女たちがあの世とこの世の媒介者になったきっかけは、家庭内の不幸などに起因する心身の変調である。

心身の変調は、ときには精神の錯乱ともなるが、そこに精神科医という「近代」は介入しない。近くにいる先輩ユタがやってきて、ユタになれという神の命令（召命）と判断される。いわゆる「巫病」だが、巫病をイニシエーションの階梯として、彼女たちは、あの世とこの世、狂気と正気という二つの人格の交替を統御できるシャーマンになってゆく。

ユタのような召命型のシャーマンにたいして、巫病（召命）の階梯を経ないシャーマンがいる。たとえば、北部九州にはトウニン、関西地方にはダイサン、東北地方にはイタコとかオナカマとか呼ばれる女性シャーマンが最近まで活動していたが、彼女たちはいずれも盲人である。

巫病の階梯を経ない盲目のシャーマンは、修行型といわれる。視覚障害者のばあい、師匠のもとでの一定の修行だけで、あの世とこの世の媒介者になることができたのだが、このことは、「ものがたり」の語り手になぜ盲人が多いのか、「ものがたり」において語り手とはなにか、という問題を考える手がかりになるだろう。

聴覚と皮膚感覚だけで世界を体験する盲目のかれらは、「じぶん」というものの輪郭が健常者とは異なるだろう（いわゆる「鏡像段階」の有無）。そんな彼あるいは彼女が、「見えない存在の物音」、これはアルトー版の「耳なし芳一」にある言葉だが、見えない存在のざわめきのようなものにじぶんをシンクロナイズさせるかたちで、過去の死者たちのモノ語りを語る。

たとえば、中世の琵琶法師は、芸能民であると同時に宗教民でもあった。そんな琵琶法師のありようは、九州地方の座頭・盲僧によって近代まで伝えられていた。

たとえば、耳なし芳一の話の舞台となる阿弥陀寺（山口県下関市）のある山口県や、島根県の一部をふくむ中国地方西部から、九州一円にかけての西日本では、琵琶法師がさかんに活動していた。昭和初年ころまで、琵琶弾きの盲人をみかけることはめずらしいことではなく、かれらが行なう神事・儀礼は、この地方では欠くことのできない信仰習俗になっていた。

琵琶弾きの座頭・盲僧は、正月に、村単位で行なわれた地神祭にまねかれ、五穀豊穣の祈祷をした。また、四季の土用に家々をまわって、カマドの前で「地神経（じしんきょう）」をよみ、かまどの神を祓いきよめた。そして、地神祭やかまど祓いのあとには、余興として、段物（複数の段からなる語り物）を語り、

正月には祝言の歌謡をうたった。このような琵琶法師の習俗が、九州では、一九八〇年代までかろうじて残っていた。

ところで、西日本の盲僧・琵琶法師が伝えた「地神経」が、すでに平安時代から存在したことは、さまざまな史料から確認できる。「地神経」（地心経とも）には、堅牢地神と五龍王という神が登場するが、堅牢地神は、仏典の『金光明最勝王経』などに説かれる大地の女神であり、五龍王は、陰陽道系の神である。陰陽五行説にもとづいて、東西南北と春夏秋冬を司る青、赤、白、黒の四体の竜神がいて、中央の大地と四季の土用を支配する黄の竜神、黄竜王が主神とされる。

この仏教の神と陰陽道の神とを習合・混淆したような「地神」の信仰が、琵琶法師によって担われていたわけだ。「地神経」は、日本以外に、韓国でも「地心経」として行なわれ、韓国の「地心経（ジシムキョン）」も、盲目の民間宗教者、読経（トッキョン）によって担われていた。

日本の琵琶法師のあいだでは、「地神経」で説かれる五竜王に関して、その由来譚として五郎王子譚という物語が伝承されていた。かれらが唱えた釈文（和文で説かれる経文）の物語であり、黄竜王すなわち五郎王子が、五竜王の主神として、中央の大地と四季の土用を治めるにいたった次第を語る物語である。

その五郎王子の物語のなかに、五人の王子（竜神）たちの争いを調停した「文選博士」なる者が出てくる。五郎王子が「文選博士」に感謝したことばは、我らはたとえ人間によって眼を穿たれ、頭を打たれても、文選博士の子孫ならば、その過ちを許して祟りをなさないというもの。つまり、「文選博士」の子孫である琵琶法師による祭祀が行われるなら、大地を掘りうがつ人間の営みも許されるというのだ。

大地を掘り穿つことのタブーのは、ミルチャ・エリアーデが多くの事例を紹介しているように、地母神信仰のタブーである。琵琶法師がまつる地神は、大地に豊饒をもたらす地母神であると同時に、祭祀をおこたれば祟りをなす神でもある。つまり地神は、豊饒と死（破壊）、エロスとタナトスとを両義的につかさどる神格として、それは、母なる大地の女神であると同時に、霊威はげしい王子の神としても表象されたわけだ。

5　竜女（りゅうにょ）の両義性

平家一門が壇ノ浦でほろんだのは、元暦二年（一一八五年）三月である。その三ヶ月半後の七月九日、京都の町を大地震が襲った。地震の惨状は、当時の貴族の日記に詳しいが、平家物語巻十二「大地震」によれば、この大地震は、安徳天皇と平家一門の「怨霊」によって引き起こされた。また、慈円の『愚管抄』も、この地震にかんする風説として、「平相国（平清盛）竜になりてふりたる」と記している。大地震後の京都で、平家の怨霊や大地の竜王の祟りを説く民間の巫覡の徒（琵琶法師もその一類）が、さかんに活動していたことが想像されるのだ。

平家の怨霊信仰は、地神（大地の竜王）の信仰と交錯しながら流布したのだが、平家の怨霊のなかでも、もっとも恐れられたのは、平清盛であり、また清盛の孫にあたる安徳天皇の御霊である。壇ノ浦合戦では、三種の神器の一つである宝剣（クサ

ナギノツルギ）が、安徳天皇とともに海に沈んで失われた。平家物語巻十一「剣」には、宝剣が失われたのは、かつてスサノオノミコトに宝剣を奪われたヤマタノオロチが、安徳天皇に生まれ変わって取り返したのだとある。

また、『愚管抄』は、安徳天皇は、竜女である厳島明神が、清盛の祈りにこたえて「変成男子」して出生したゆえ、八歳でもとの海に帰ったと記している。竜女とは、『法華経』「提婆達多品」で、「変成男子」して成仏したとされる竜王の娘である。平安時代以降、女人成仏の本説として広く信仰され、また、多くの神社の女神（厳島明神もその一つ）の本地が竜女とされるようになる。

安徳天皇が竜女の生まれかわりとされる一方で、安徳天皇の母、建礼門院も竜女だとする説が行われた。平家物語の末尾には、建礼門院の往生が語られるが、彼女の成仏は「竜女が正覚（成仏）のあとを追ひ」と語られる。

建礼門院とその子安徳天皇が、ともに竜女の化身と考えられたわけだ。つまり、安徳天皇は、母なる竜女建礼門院の分身であり、竜女のいわばアラミタマ（荒御霊）としての御霊若宮である。

平家物語の末尾では、建礼門院が安徳天皇を供養・鎮魂したことが語られ、この物語は「灌頂巻」と呼ばれる。「灌頂」は、秘曲伝授を意味する語である。安徳天皇と建礼門院、御霊若宮とその母神の物語は、琵琶法師たちによって、「秘曲」として神話化されて伝承されたのだ。

琵琶法師の芸能座を当道座というが、当道座の最重要の年中行事は、二月の石塔と六月の涼塔である。京都の三条東河原で行われた石塔と涼塔について、当道座の文書は、石塔は琵琶法師の始祖雨夜尊（あまよのみこと）をまつる儀式であり、涼塔は雨夜尊の母后をまつる儀式だとしている。石塔と涼塔でまつられたのは、盲目の王子神とその母神という、母子一対の神である。

6　琵琶法師とは何か

母と子の神の対という関係は、「ものがたり」の語り手としての琵琶法師の位相を考えるうえでも重要な手がかりをあたえる。

近世に流通した当道座の由緒書『妙音講縁起』には、当道の官職（盲官）は女官ゆえに、当道盲人は葬儀などに呼ばれて死の穢れにふれてもさしつかえないとある。盲人が私称した官職には、たしかに勾当、中臈、打掛など、女官を思わせる官職名が少なくない。

それからもう一つ、琵琶法師の名乗りとして、「〇一」という法号がある。平家物語の覚一本をつくった覚一が有名だが、覚一が名のった「〇一」のような名のりを、一名（いちな）という。覚一は、当道座の組織を成立させた人物だが、その覚一が活躍した一四世紀なかばは、時衆教団が大いに教線を拡大した時代である。当道座は、時衆教団との密接な関係のもとに成立したのだが（拙著『平家物語の歴史と芸能』吉川弘文館、二〇〇〇年）、時衆の七世遊行上人託何（たくが）が定めた『遊行条々法則』によれば、男の法号である阿号（〇阿の法号）にたいして、一号（〇一の法号）は女の法号である。

女の法号を名のり、女官をおもわせる官職を私称する「盲目」の琵琶法師は、同時に、法師形でありながら、袴をはいた俗体である。「ものがたり」の語り手である琵琶法師とは、要するに社会的なアイデンティティのあいまいな存在だったということだ。

母なる神とその御子神を始祖としてまつる琵琶法師にあっては、要するに、自己同一的な主体形成の契機となる父なる神（他者）が不在だったということになる。そこに形成されるのは、自己同一的な「我」の不在において、あらゆる述語的な規定を受け入れつつ変身する（憑依する／憑依される）主体である。そして、みずからの帰属すべき中心をもたない主体は、ことば以前の非ロゴス（モノ、霊、狂気）を受け入れる容器となるだろう。

さきにあげたアルトー版の「耳なし芳一」のことばでいえば、「見えない存在」のざわめきである。異界のモノのざわめきに声を与えるシャーマニックな主体は、ことば以前のモノから、語りのことばが分離・発生してくるそのはざまを生きる者として、本質的に両性具有的な存在である。

ことば以前のモノのざわめきから、ことばが立ちあがる機制は、比喩的にいえば「変成男子」である。そのような両性具有的な主体こそ、非ロゴスの狂気のざわめきに声をあたえ、言語化・分節化されないモノから、語りのことばが分離・発生してくる現場（まさに「変成男子」である）を、その発生のはざまにおいて捉えるモノ語りの語り手である。「変成男子」する両性具有の神（竜女）は、異界のざわめきと、そのアナーキーな力をこの世に媒介する琵琶法師たちにとって、たんなる比喩を超えて、まさに職能の神なのであった。

〈参考文献〉
兵藤裕己『琵琶法師――〈異界〉を語る人びと――』（岩波新書、二〇〇九年）